



スカウト 浄土

The Scout Jōdo

スカウト運動と宗教

— 選択本願念佛集とスカウト教育 —





正しく合掌しよう

浄土宗スカウト連合協議会理事長

溪 逸郎

「月影の いたらぬ里は なければども

ながむる人の 心にぞ すむ」

浄土宗の宗歌「つきかげ」は、宗祖法然上人が、観無量寿経というお経の中にある「光明遍照十方世界 念仏衆生撰取不捨」という御文を和歌としてお詠みくださったものであります。

「月影のいたらぬ里はなければども」というお歌の前半は、お月様の光、如来様の光明、如来様のお働きを表しています。満月の明るい光が、こうこうと地上一切を照らすように、阿弥陀如来さまの大慈悲は、すべての者の上に降りそそがれているのであるというのです。

これに対して、お歌の後半は、私たち衆生の勤めを表しています。お月様がどんなに明るく照らしていても、戸を開けて家の中に閉じこもっていても、その光を身に受けることはできないのです。「なかむ(め)る人の」と窓を開いて月を振り仰いでこそ、月の光はその人の心の底まで照らすことができるのです。

「南無阿弥陀仏」と声を出して阿弥陀如来の御名をおとなえするとき、阿弥陀如来は「心にぞ澄む」「心にぞ住む」と心を清め心に住みついて私たちを導き、お救いくださるのであるという浄土宗の根本の教えがここに歌い上げられているのであります。

* * *

仏教でもキリスト教でも、そのほかどのような宗教でも、それぞれ合掌とか礼拝という作法があります。

それは、自分自身の姿勢や動作の上で、その型をととのえて作法をすることによって、自然にその心がととのえられるからであります。

「敬いの心が出来たら自然に頭が下がるでしょう」というのも道理ですが、身体と心が一体である私たちにとっては「手をあわせて頭を下げることによって、自然に敬いの心が湧いてくる」という事もまた事実なのであります。



「掌を合わせると真心が目覚めます」といわれます。背筋をまっすぐにして、きちんと合掌すると、心がまっすぐに、み仏さまや神様の方に向かいます。静かに深々と礼拝すると、その心は尊い神仏に対する敬けんな敬いの心に染まってゆくのであります。さらに、聖歌を歌い聖句を朗読し、「南無阿弥陀仏」とみ仏の名を称えるとき、自然にその心に、み仏様が宿ってくださるのであります。そうして、そのみ仏様に導かれて、私たちは、人間としてスカウトとして、今日の一日を、あるいはその一生を生きさせていただくのであります。

さあ、背筋を真っ直ぐにして正しく合掌し、声を励まして「南無阿弥陀仏」とお念仏をお唱えいたしましょう。

選択本願念佛集と

スカウト教育

総本山知恩院執事長
浄土宗スカウト連合協議会顧問

牧 達雄

大変むづかしい課題が与えられました。昨年は、法然上人の畢生の著書である選択本願念佛集のご撰述になりました。丁度八〇〇年に当たりました。

このお書物は、鎌倉時代における宗教改革の書であるといわれている程重要なお書物であります。このお書物の精神、それはまさしく法然上人のみ教えの精

髓であります。このお書物に説かんとされる法然上人のみ教えと、スカウト教育について所見を述べたいと思います。

まず、スカウト教育について基本的なことを考えてみましょう。端的にスカウト教育とは何かということですが、それは立派な公民的資質を培う教育であるといわれてきました。公民教育とは、国家、社会の形成者として望ましい人間を形成する教育だと、非常に抽象的な説明がなされてきました。最近では教育について、生涯学習という言葉で表現される考え方が世界的な教育に対する考え方として主張されています。そこで、生涯学習という観点からスカウト教育について考えてみたいと思います。

生涯学習という考え方は、一

九六五年、ポール・ラングランが、ユネスコの「成人教育推進国際委員会」で提唱したのが最初といわれていますが、今から三十四年前です。それが今では全世界の教育的考え方の主流をなすに至っております。

生涯学習とは自らが学習することであり、生涯教育とは、生涯学習を支援していく体制であります。

この生涯学習には三つの柱があります。

その第一は、生れてから死に至る全生涯に亘って行われる継続学習であります。その二は総合的な学習ということであり、その三は問題解決学習ということであります。

このような三つの特色をもつ生涯学習なのですが、何故、生涯にわたって継続して行われなくてはならないのか、その考え方は、従来、教育といいますが、学校教育が教育の中核であり、大部分であると考えられてきました。教育予算にしましても、九割近くが学校教育に関する予算であり、他の教育部門は、そ

の一刻にも達しない状況でした。社会教育等もまさにその通りで、予算もそうですが、社会教育は学校教育の付属的なもの、補完的なものでしかなかった。甚だしきは、以前は社会教育は通俗教育といわれ、その責任者は小学校の校長先生が当っておられた。それに比し学校教育は、小学校から中学校、そして高等専門学校、大学という体系が確立し、その活動が教育と考えられてきたのです。そのような体系に対して反省がなされ、見直しを余儀なくされるようになってきました。それは、高度成長経済とともに、それを推進してきたものに技術革新があった。それが急速に進展してきました。そのような状況下にあった、従来の高等教育、大学を出た人たちは、卒業すると、学校教育で身につけた知識技能が、そのまま社会や企業のリーダーとなりうるような知識技能であった。ところが、技術革新の急激な発展における、その推進をなしたものは、企業自体であった。そして、その急激な進



研修会で講演する牧 達雄先生

展の中で、最早や大学を出ただけでリーダーとなりうるような時代は去ってしまった。ではどうすればよいか、大学は果して社会の要請に込んでいるのか、卒業後も学習しなければ、到底社会の進展についていけないのではないか、ということから継続して行なわれなくてはならない。また総合ということですが、今までよくいわれましたが、なかなか実現できなかったことに学社連係があります。しかしそれがなかなか実現できなかった。学校教育の方がのってこないであります。しかしそうであってはいけません。社会も、家庭も含めて、教育をあらゆる場において総合的な見地から見直さなくてはならないというのであります。さらに第三の問題解決学習は、最も基本的な重要事項であります。技術革新の急速な進展に対応しうるのは、何を学んできたかということではなく、どのように学習してきたか、どのような問題を通じたか、どのような問題と問題と取り組む、どのように解

決してきたか、という問題解決、努力こそが求められているのであるというのであります。

ところで、教育を誤らしてきただものの最たるものは何かという点ですが、それは大学入試制度にあるといわれてきました。日本の大学入試は、ベテランインテリゲンチーといひまして、大学に社会通念が順位をつけてしまっていて、順位の高い大学に入るための教育が高校においてなされ、またよい高校に入るための中学教育、その中学へ入るための教育という教育の本質からはなれた考え方が、教育界、いや社会を支配してしまっています。これは日本だけの現象であります。これが決定的な問題点であります。そのような教育、即ち入試対策のみの教育は、殆どが詰め込み教育であります。そのような教育でなく、本当の教育とはどのような教育なのか、といいますと、第三の問題解決学習、自発学習こそが大切であるということになります。学力とは知識でなく、問題

解決の能力であるといえます。

この点からの教育の見直しが生涯学習であります。このような教育は、高等教育でなく、小学の教育から、否、就学以前からなされなくてはならないのであります。そういった点から、生涯学習は、ともすれば従来の社会教育的立場から進められてきました。本当は、学校教育自体が改善され、問題解決能力を身につけることが基本となり得ます。そして教育において、その大部分を受け持つ学校教育が、先ず生涯学習化されることが重要な意味をもつものであります。

そこで教育改革の第一歩は、学校教育、特に大学入試の改善が重要課題となってきます。ところが大学入試と改革、これがなかなか進まないですね。日本は大学に入るのが難しく、出るのは易い、欧米では卒業が難しいのです。しかしわが国においても少しずつ改革は進められていきます。

た。これは生涯学習的立場からの改革の一つであります。一度社会に出た人が、その社会で様々な問題に出会う。そしてその問題を自己の問題とし、その解決をもう一度大学に入って解決しようとする。それをカレント教育といっています。まさに社会的に学習したことが総合的に結集され、問題解決能力になっていきます。

さらに他の教育機関で学習したことが、単位として認められるように改善されている。例えば短大や、専門学校とか専修学校で学習した単位が大学の単位として認められ、総合的に学習を認めていく方向で改革が進められています。単位の互換制度とか、累積加算制度がそれであります。

そのように今、教育全体が、生涯学習という点から見直され、改善をしようと大きな変化が遂げられつつあるのです。

その中において、スカウト教育はどのように見られるかと申しますと、スカウト教育はまさにこの教育を行ってきたのであ

ります。と申し上げますことは、スカウト教育は、教育の本当のあり方を正しく見ていたということだといえましょう。

いかがでしょうか。生涯学習の継続学習ですが、スカウト教育では、ビーバーから、カブ、そしてボーイ、シニア、ローパーと一貫した教育を行っておりますし、ローパーを終えてリーダーとなり、死ぬ時まで、いや死して後もスカウトであるといわれますね。まさに、生涯を通しての教育であるといえます。又、問題解決能力を身につけるといふことも、自発的活動といふこともすべてスカウト教育が願ってきたところであります。進級制度は、問題意識をもって挑戦してしていくのであって、そこにスカウト教育の特色がある。富士スカウトに挑戦し、富士スカウトになるといふことは、それでスカウト教育が終わるといふことではない。それに挑戦し、問題を解決していったその力をもって社会人となり、人生を開拓していく開拓精神こそが、スカウト精神であり、生涯

学習そのものなのです。

またスカウト教育において重視されてきたものに四つの分野がありますね。スカウト活動は、一般的に奉仕団体ではないかと思われているように、奉仕を重要視します。ところが、奉仕をするためには技能を身につけることが必要で、ここに技能章制度というのがあって、それを教育の内容としている。また奉仕をするためには健康が大切であります。しかしまた、いくら体が丈夫で技能があっても、精神がすこやかでない駄目です。すこやかな精神は、信仰によつて培われます。スカウトは信仰を大切にします。この四つの部門がそれぞれ深く関わりあっている。このように総合的に、人柄が形成されているのがスカウト教育であるといえます。私は、この四分野が総合的に関係していることは大切ですが、その関係に、中心となる心樞がなくてはなりません。太い何かがないといけません。それが柱となり、基盤となつて、その上に健康があり、技

能があり、そしてその上に奉仕がある。そのようなピラミッドが関係してなりたつのではないのでしょうか。それが安定したスカウト教育であるといえます。

そこで教育と信仰を考えてみますと、日本の教育は明治以後基本的に誤りがありました。明治以降、日本の教育は、先ず西洋に追いつけ、追越せでした。それは特に科学の面においてであります。西洋科学に追いつけであつて、技術面が中心でした。それが学力だと思つていたんです。そして、一番大切な人格形成の基盤である宗教を教育から排除したのです。明治三十二年に発せられた、文部省訓令第十二号がそれです。それ以後、全ての教育から宗教が完全に排除されたのです。日本の法令の中で最悪の法令が、この訓令第十二号だといふ学者もあります。そして、国家神道だけは宗教ではないとして、神道を教育の基盤におきました。そこから国家主義、軍国主義的な教育があらゆる教育の場でおしすすめられ、遂に太平洋戦争へ

と突入してきました。その中でボーイスカウト運動も例外ではありませんでした。軍国主義的少年団体への統合が強要され、それを是としない立場から一旦解散を余儀なくされたのは、忘れてはならない事実であつた。

教育は一度その道を誤ると、それを正すのに最低五十年、いやそれでも正すことは出来ないかも知れない。特に宗教と教育の問題の誤りは、それを正すのに少なくとも一世紀以上を要するのではないのでしょうか。明治以降の教育の誤り、特に宗教的情操を教育から排除した誤りは、戦後その誤りが指摘され、正そうとしましたが、未だにその誤りを正すことは出来ず、五十年を経ても教育の混乱は相次いでおります。世紀末をむかえて、経済において、政治において、様々の難しい状態をかかえておりますが、教育の混乱ほど大きな問題は他にないといえるのではないのでしょうか。

今になって、国は心の教育の大切さを強調しておりますが、心の教育程むづかしいものはない

い。大信心というものは捕らえどころのないものなのです。それをどう教育するのか、その具体的方法は一切示されていません。心を最も深く見つめてきたものは、やはり宗教だと思えます。中でも仏教は人間の心を一番深く見つめた宗教であろうと思います。

さらに仏教の中でもまた、法然上人は人間の心の深層を徹底的に見つめられたのであります。そして、その上になつて、万人救済の道を阿弥陀仏の本願念佛に見出されたのが法然上人であります。法然上人は、本願念佛を阿弥陀仏御自らがお選びになつて、人びとに与え給ひ、釈迦牟尼仏はまた、本願念佛を凡夫救済の究極の道としてお選びになり、さらに六方の諸佛はまた、本願念佛によつて、万人が救いとされていくことを讃嘆され、証明され護念されていられるのだということ、経論の所説をあげて論述されたのが選択本願念佛集というお書物であります。この選択本願念佛集は一番最初に申しましたように、

日本における宗教改革の書であるといわれております。

選択とは、選び及びとるという意味で、誰が何を選択するかといひますと、今申しましたように、阿弥陀さま、お釈迦さまそして六方の諸佛方が、阿弥陀さまの本願である念佛を選択されたのだということです。三仏の選択といつております。本願念佛を選択されたのですから、他の教えであるとか修行を一旦捨て、閑し、掘おき、掘うつて、専ら本願念佛を修すること、専ら本願念佛を論述されたのであります。そして、何のために仏さま方はお念佛を選びとられたのかといひますと、万人のため、一切の人々を救済するためであります。では何故仏さま方は、本願の念佛を衆生のために選択されたのでありましようか。

このことについて選択集の中で、元祖さまは「聖意測り難し」と申されて、み仏のみ心を我々凡夫の浅はかな知慧で推測することは難しいことでありますと申しておられます。然しながら秘かに拝察いたしますと、勝と易という二点が考えられるとされています。勝といひますのは、本願のお念佛は、六字のご名號をお称えするという簡単な行のように見えるけれども、その中には、阿弥陀仏の兆歳永劫にわたるご修行の功徳が阿弥陀仏の本願のみ心として含まれている。すなわち六度万行の功徳が含まれているのであるといふことで、他にどのような私どもの修行にも勝っているのだというのであります。そして次の易といふ意味は、そのような勝れた称名念佛という行は、どのような人間であつても、万人が修し易いのである。如何に勝れた行であつても、機根の劣なるものが修し難ければ、宝の持ち腐れ、猫に小判でありま

していても、お念佛をお称えすることは出来るのでありますから、易、すなわち行じ易いといふのであります。

文治二年（一一八六年）本願問題が行われましたが、それは天台宗の碩学顕真僧都が呼びかけて、法然上人は諸宗の碩学と問答され、念佛の法門がすぐれていることを論証されました。そしてそのことを、法然上人は「法門は互角なれども、機根比べにおいて法然上人勝れたり」と申しておいでになります。このことは、仏の教えは、全て仏説であつて互角であります。機根、すなわちそれを行ずる衆生の器量にかなうかどうかという点で私の主張の方が勝れていましたというのであります。このことは勝と易ということでありま

ら、百八十度の転換をなさいますので、宗教改革の書であるというのであります。

一般の仏教は修道として戒、定、慧の三学を修する、それが仏道であるとしています。

戒とは、一切の悪をなさず、一切の善を行い、世のため人のためにつくすということ。この戒を修めることによって精神が安定し、統一されてくる、乱れない。それが定であります。そしてそのような精神のすみきった統一された上に本當の智慧が生じてくるというのであります。この智慧のはたらきによって、悟りを聞くことが出来るのであります。智慧とは真実を見るはたらきであります。真実を見るということとは、心に触れるということではないでしょうか。この戒、定、慧を修することを三学といひまして、法然上人以前の仏教は、全てこの三学を修する仏教でありました。しかし法然上人は、自分を含めて殆どの人々が三学の器ではない、三学を修することが出来ない凡夫なの

であると申され、そのような凡夫が救われるのは本願の念仏以外にないとされました。さてここで本願の念仏とはどういうことでありましょうか。本願の本とは、基本、根本にある願ひ、仏さまのおもいという意味があります。それが一つですが、今一つ、本願とは、本来、もともとある願ひという意味があります。この方が大切なのであります。釈尊の伝記に、本生譚というのがあります。ジャータカ物語りなのですが、それは、お釈迦さまは現世において六年間のご修行ののち、お悟りをおひらきになって、仏陀となり給うた。それはまことに尊いことでもあります。実はそれ以前から、今生にお生まれになる以前、前世から生れ変わり死に変わりながら善根を積んでこられたのである。この功德によって今生に仏陀とおなりになったのである。ということをお話しして語られたものが、本生譚という物語であります。この本生の本、それは、ずっと以前からとも願ひつづけられている願

ひということでありました。この本願については、無量寿経というお経にそのことが説かれております。それは、今から久遠の昔、無量劫前に錠光如来という仏さまが此の世にお出ましになり、人々を教化され、得度せしめられ、おなくなりになりました。そして次々と五十三仏がお出ましになり、五十四番目に世自在王如来がお出になりました。時に国王がおられて世自在王如来の説法を聞き、心に大きな喜びを得、国を棄て、王位もすてて沙門となり、法蔵となり、四十八の願をたてて菩薩の修業に入られました。その四十八願を建てられるに当り、五劫の間、思案を重ねてこれを検討されたのであります。そして兆載永劫の間あらゆるご修業をなされ、遂に今より十劫の昔その願を成就なされて阿彌陀仏となり給ひ、今現に西方十万億土の彼方、極楽浄土にましまして衆生を救済なさっておられるのであると説かれています。

この経文の中にしばしば出てくる却とは、インドにおける時問の単位で四キロメートル立方の大きな岩に百年に一度天女が降り来り羽衣でひとなでして天に還り、また百年過ぎた時降り来り羽衣でなで帰る、かくしてその大岩がすり減って無くなってしまふ時間を却といふのであります。無量劫とは、その却を六十九乗した数で、あるといわれまふ。まさに、宇宙の始めから終りまでの時間に相当するのださうですが、そのような永遠の昔から、私どものいのちの奥底に阿彌陀仏の本願の心が秘められているのであります。その四十八願の中、第十八の願は称名念仏の本願であります。それは十返のお念仏をお称えするならば、必ず浄土に生れしめるだらう。若しそれが不可能ならば、私は誓つてさとりを得ないといふ阿彌陀如来の強い願ひであります。それを信じて私たちはお念仏をお称えするのであります。それが無量劫の昔より念ひ続けられているのであります。これを本願と申します。

みたいと思います。私どもの遺伝子というのは、村上和男先生という筑波大学の先生の話によりますと、三十億の記号から成り立っていて、私どもの生命のあらゆる活動を指示しているといっています。三十億の文字というのは、大百科事典一千冊分の小さな文字の数と考えていい、それが巾二千億分の一ミリというリボン状のところに、階段状に書きつづけられているのだそうです。それを世界ではじめて千五百字解説されたのが村上先生なのです。この遺伝子はD・N・Aといわれ私のD・N・Aは私だけのもので、父と母の遺伝子が組み合わさってなっていて不変のものであるといっています。その文字のもつ意味を解説すべく、研究に熱中しておられた先生に、ふと疑問が湧いてきた。と

年月をかけて書き綴ってきたのだ」と思い、心が落ちつきましたが、「大自然といっても、木や石や水等が書く筈がない、大自然の一体何が？」とまた深い疑問に落ち入りました。そして遂に「そうだ、大自然の念いが、大自然の願いが、何十億年という長い年月、ぶうっと私どものいのちの奥底に念いをかけ、願いをかけて書きつづったものがあり、その自然の念い、願いを、宗教は神といい、仏と名付けたに違いないと気がついた時、私は大きな感動を覚えた。」と申しておられます。私はまさにこのD・N・Aこそ、阿弥陀仏のご本願なのだと思えました。死ぬも、生きるも、すべて遺伝子の命ずるところ、み仏の本願のみ心だと思えます。その本願のみ心に開く道こそがお念仏だと思えるのです。そしてそのお念仏こそ、み仏のみ心にかない、人生のあらゆる問題を解決する唯一のキーポイントであると思えます。選択本願念佛集は、このところを経験の所説、すなわちみ仏のみ心によってご選連なさい

ましたお書物であります。スカウト教育のポイントはこのような信仰心を基盤とし、健康な心身をつくり、技能を身につけて、世のため人のためにつくすことだといえます。そしてまさしくスカウト精神、開拓精神をもって人生に処していくのですが、それは問題解決能力を身につけることであります。その問題解決の最も基本的なものが、まさしくこの本願念佛にあるものだといえます。私の恩師でありました松浦一先生は、

先生は、
生れては
野こえ 山こえ
旅路ゆく 我に給いし
み仏の杖

と歌っておられます。よくよく味わって見たいものであります。

第十二回

日本ジャンボリーに かけつけた社会局長

第九回日本ジャンボリーは曹洞宗の担当だったので台風の直撃でせっかく前夜にパーティーを開催し曹洞門のトップの方々が駆けつけたのですから中止に

なり肩を落とされていました。特にこのときの八月五日は記録的な大雨で、スカウトも一時避難したほどで、わざわざ各宗門や各都大本山から通務教団全体の礼拝後の宗派別礼拝の為に用意になっていた方々も大変だったと思います。

平成十年八月秋田での第十二回日本ジャンボリーもこの時とまったく同じようになっちゃいました。前夜のパーティーも済まし宗門関係者は前夜基地にお願いでいた会場・森吉山・麓にある阿仁町の専念寺に戻り翌日の準備をして、就寝しようとするころから夜半の雨が勢いを増し午前三時ころ宗教部から連絡が入りジャンボリー本部の気象班による気象状況の判断で中止となったのです。

せっかくこの日の為に記念品を準備し、宗務庁から吉田昭寿社会局長においで頂いているのでせめて用意してきた記念品を浄土宗関係団にだけでも配布しようと思われ中を長靴姿で駆け込みあり広大な会場を渉理事長と事務局員で巡回し手渡しながら励ましてきました。平成十二年のベンチャー宗教礼拝は浄土宗担当です。天候だけは如何にもなりません。せめて心だけでも引き締めていくところですよ。



今、うちの団では……

各地のスカウトだより

『今年の団活動』

ボーイスカウト大田第一団

昨年は日本ジャンボリーに大田第一団から、見学参加も含めて三十三名が参加しました。今年はそのような大きな大会はありませんが、団として夏休みに信州へキャンプに行く予定で「空飛ぶテント」のように、スカウト達も空飛ぶ勢いで、スカウト技能を高めるべく、張り切っています。

宗教行事として、今春の四月十一日に町内仏教会主催の「花まつり」にも参加し、お釈迦様のお誕生日を祝います。その準備として二月から大きな張りぼての白象をスカウト達の手で作し、お参りの方々の甘茶の接待もします。そして、法要では

五種供養をスカウト達が行う事になっていきます。

現在、大田第一団では女子スカウトが増えてきて、八名の女子スカウトがいます。彼女達もやる気満々で、男子スカウト以上に熱心です。リーダー達も毎週日曜日の集会にスカウトが楽しんで参加できるよう、頑張っています！



『スカウト一家誕生』

ボーイスカウト大阪第七二団

昭和三十五年十一月にスタートした七一団は今年で四十五周年、その記念すべき年に、我団初の「スカウト一家」が誕生しました。

ボーイ隊長伊藤茂隊長は小四で入隊、スカウトを経て、大学時代カブ隊長に就任しました。以来二十年近く活躍し、今年度ボーイの隊長に任命されました。奥様の裕子さんはカブのデン・リーダーとして、長女桜さん(くま)長男兼太君(うさ



ぎ)は共にカブスカウト、末の良平君はビーバー、とまさにスカウト一家。家族でスカウト活動を楽しんでいます。

「お蔭様で」の言葉の意味、育成会長(大長寺住職・西田亨心氏)が説かれました。「人は皆、誰のお蔭で生きている。思ひ出の多い子供ほど、心豊かな大人に成長する。」とお蔭様で、七一団も益々、活気づいています。第二、第三の「スカウト一家」が誕生する様団一丸となり、頑張ってください。

『私の団では』

こんな事を

予定しています』

ボーイスカウト宮城県第一九回

雲上寺スカウトは、昨年発回十五周年を、迎えました。十五周年を祝う記念行事として、昨年は、合同キャンプをしたり、今年の三月末には、ロサンゼルス遠征を予定しています。内容として、ロサンゼルス市内のスカウトとの交流会、ボーイスカウト専用ビーチでのキャンプなど一般の観光では、体験出来ない企画を予定しています。また、初めての試みとして、一月には成人を祝う会を予定しています。住職の法話、スカウトの琴の演奏、茶の湯などでお祝います。スカウトの人数が年々減少し、又学校や習い事などで忙しくスカウト活動を継続していくのが、難しくなっているこの頃ですが、スカウト活動の素晴らしさを、スカウト達に伝えて行きたいと思えます。これから二十周年、三十周年と迎えられるように頑張りたいと思えます。



『団の活動予定』

ボーイスカウト大阪第一二四回

今年は、ボーイスカウト大阪連盟創立五十周年を迎え、各隊の記念行事が予定されており、当団に於ても、ビーバー隊は五月のビーバースカウト大会へ、カブ隊は四月の一泊、小豆島へのクルージングへ、ボーイ隊は八月の夏季長期キャンプボリーに各々、参加を予定しており、普段の活動において体験できない事を多く体験出来る良い機会であり、他の多くの仲間との交流を大いに深めて、楽しい思い出を多く作ってもらい、大阪府内のスカウト仲間意識の高揚とスカウト活動への意欲をさらに増大させる契機と考えられ、さらなる発展を願っております。

又、我、大阪第一二四回も、来年創立三十周年を迎える事になり、団委員長をはじめ、OBの方々にも参画していただき、意義ある記念事業を実施すべく準備中であり、忙しい一年になると思われます。



『私たちのびるんじ』

ボーイスカウト山口県第二十三回

昨年七月、ガールスカウト山口県キャンプ大会に参加後の集会で、友達が沢山できた事、グターが一人で漕げた喜び、ぐらぐらとまわってばかりだった話等、次々と皆の口から飛び出

した。その中で、講師による環境問題のお話について自分で考え、実行しようと思う事。①台所の三角箆には何でも流さない。特にラーメンの残物残汁に注意する。②食器洗いを工夫する。洗剤を使わないように紙で拭きとり、毛糸クワシでよくこする。

③水道の蛇口をこまめにしめる。

次に交通事故について、毎日聞くスピードの出すぎによる死亡が激増している今、歩く私達もよく注意しなければいけないが運転手の皆さんにゆとりをもつて運転してもらうように、九月の交通安全旬間のマスケット作りを考えようと思いがまとまりました。今までの「事故防止」につながるミルク帽子から今年「ゆっくり走り」三色信号かたつむり作りに決定しました。

シニア、レンジャーの研究で、三百個のマスケットを全員で作り、育成会長、リーダーといっしょに河内山市長さんにお渡ししました。交通安全初日、ドライバーの方達に交通安全協会の方々が配布されました。

『十周年を目前に』

ガールスカウト長野第三十六団

私共の団も皆様にお助け頂いて中央アルプスの山すそに発団して早十年を迎えようとしています。発団当初小さかったスカウト達も背丈はすでにリーグーをはるかに追い越し制服を何枚新調したことでしよう……

十周年を目前に、私共のスカウトは団外への活発になってきました。一昨年は浄スカ三十周年行事の海外派遣のスカウト五

名の参加を初め、支部の行事はもちろん、北関東地区ギャザリング、シニア全国キャンプ参加等々。シニア、レンジャースカウトを中心にとんとんと外に向かつて活動の巾を広げています。又、三月の水保での仏教章研修会は、環境問題を含めての研修の計画もあり、当面このスカウト達の芽を摘まないよう団あげの協力が我団のひとつの課題です。縁あってめぐり会えた人間関係を大切に共に成長して行きたいと願っています。



『創立五十周年を

迎える草津第二団』

ボーイスカウト草津第一団

我がボーイスカウト草津第一団は、昭和二十五年十二月に栗太第一隊として草津市青地町の西方寺住職牧達雄師（現知恩院執事長）を中心に、そして西方寺を活動の拠点として続けてまいりました。丁度、平成十二年（西暦二〇〇〇年）には創立五十周年を迎えることとなります。この半世紀に及ぶボーイスカウト運動を支えて下さいました関



係の各位に深甚の敬意を表するものでございます。

五十周年を記念して次の事業を計画しています。

- ◎五十周年記念誌の発行
- ◎五十周年記念式典の開催
- ◎五十周年記念団大会の開催
- ◎五十周年記念海外派遣事業

（采園）の開催

尚、我が団の詳細に亘りましては「知恩」誌一月号のクロージアアップ寺院（三十三―三十九頁）を御参照下さい。今後とも一層の御指導御鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

栄誉を讃えましょう

浄土宗仏教章授与スカウト(平成八年四月〜平成十一年二月)

団	発送日	氏名	寺院名	教 導 職
長野飯田	1	8.4.22	勝野実	安静達祐
長野飯田	1	8.4.22	大橋伸朗	安静達祐
長野飯田	1	8.4.22	大石黒拓二	安静達祐
長野飯田	1	8.4.22	通山新吾	安静達祐
長野飯田	1	8.4.22	通山徳和	安静達祐
港	15	8.5.2	藤原昌徳	野口義定
港	15	8.5.2	加藤功樹	野口義定
港	15	8.5.2	高野樹喜	野口義定
古川	1	8.5.27	笠村重毅	東海林良雲
大阪	71	8.7.4	筒井大輔	西田亨心
大阪	71	8.7.4	奥村謙一	西田亨心
四街道	2	8.7.24	佐藤裕史	山本本雄
四街道	2	8.7.24	江畑孝一	山本本雄
葛飾	2	8.7.29	桜井教樹	岡本本主
葛飾	2	8.7.29	菅野芳宗	岡本本主
高市	1	8.8.28	橋本隆	藤木尾村
八王子	11	8.8.30	石母田信	木村良成
八王子	6	8.8.30	伊豫匠	伊藤安成
八王子	11	8.9.11	松嶋紀和	木村良成
仙台	35	8.9.11	阿部元氣	中澤澤秀
仙台	35	8.9.11	吉野雅人	中澤澤秀
大阪	108	9.1.31	中塚裕隆	菅原昭
名張	1	9.3.3	中原正昭	菅原昭
敦賀	1	9.3.6	中西善	菅原昭
港	9	9.5.13	西川善	菅原昭
港	15	9.5.28	大岐渉	野口義定
港	15	9.5.28	加藤孝次	野口義定
上田	13	9.5.28	尾崎喜史	横内内田
上田	13	9.5.28	細川敬喜	横内内田
水俣	1	9.6.13	古川史輔	濱田田田
水俣	1	9.6.13	前田大輔	濱田田田
水俣	1	9.6.13	石塚敏敏	濱田田田
港	15	9.6.17	岡本茂樹	野口義定
豊橋	8	9.7.2	神谷章吾	鈴木本大
文京	5	9.8.1	田中宏史	岡田本主
大阪	138	9.9.4	福西聡	岡田本主
京都	27	10.2.17	竹本俊介	光成本主
佐倉	2	10.3.16	丹羽大二郎	岡本本主
四街道	1	10.3.26	村井彰介	岡本本主
大池	2	10.5.7	仲野善介	岡本本主
池田	7	10.5.11	伊藤孝博	高瀬小津
京都	88	10.8.24	神部佳史	高瀬小津
岐阜	16	10.9.18	尾崎隆史	高瀬小津
八王子	3	10.11.18	尾崎亮介	高瀬小津
台東	2	11.2.3	早坂宗俊	原原善正
台東	2	11.2.3	高梨樹	原原善正
台東	2	11.2.3	三輪亮	原原善正
台東	2	11.2.3	林亮	原原善正

編集室より

今号は、指導者研修会での元浄土宗スカウト連合協議会理事長で現在顧問の牧達雄先生の講演が主になりました。参加出来なかった方々にご覧になって頂きたいと先生に無理をお願いして講演の趣旨をまとめて頂きました。知恩院執事長としてご多忙のなか、ご無理をお願いしたものです。

指導者研修会は、浄土宗スカウト連合協議会の年中行事になっておりますが、開催期目と場所の設定がいつも問題になっております。

通例では佛教章研修会の前後に実施していますが本来は、分離して独自に開催すべきでしょう。

せっかくの素晴らしい研修を生かすように皆様からのご意見をお待ち申し上げております。

スカウト浄土(第十九号)

発行/平成十一年三月二十日

京都市東区林下町

浄土宗事務局社会局内

浄土宗スカウト連合協議会

編集者/東海林良雲

印刷/利商印刷